



Association Internationale Aphasie (AIA)

失語症とは何だろうか？

失語症問題に対応するのはおそらくしばらく振りのことではないだろうか。先ず最初にいろいろな疑問が頭を横切る。失語症とはなんだろう。どうしたらなるのか。そしてこれからどんな問題が起こって来るのだろうか。

失語症とは何だろうか？

人間はすべて言葉を使う。話し、適切な単語を見つけ出し、理解し、読み、書き、動作をつける、これらは全て言語利用の一部である。もし脳の傷害の結果として言語利用のひとつまたは複数の部分が正常に機能することを止めたとすると、これが失語症と呼ばれる。Aphasia- A (=否定) phasia (= 話す) は、従ってもはや自分の欲することを言うことができないことを意味する。言語をもはや使うことが出来ない。失語症は別にしても、以下のような事項に関して問題、能力喪失が起こる。

- 自覚して行動する
 - 周囲に注意する
 - 集中し、行動を起こしそして記憶する
- 同時に 2 つのことをもはやできない。

多くの人々は休暇で外国に行ったときに歯がゆい思いをする。それは思っていることがはっきりと言えないか、他の人が言っていることを正しく理解できないことによる。言葉が十分わかっている国に居てさえこのような経験をすることがある。たとえば医者に行ったときである。言葉のよく分からない国へ行けば交信能力は更に限られて来ることになる。本当に食べたいものを注文することが出来ないこともある。失語症の人々にはこれが毎日続くのである。従い失語症は言語障害である。ただ失語症に罹っている人達は 2 人として同じと言うことはない。失語症は 1 人 1 人皆異なる。失語症の程度と範囲は脳の傷害の場所と程度、以前の言語能力、個人の性格などによって決まる。ある失語症の人たちは言語をよく理解する。しかし適切な単語を探し、文章を組み立てるのに問題がある。またある人たちはよく喋る。ただし他の人たちには何を言っているのかさっぱり分からない。そしてこの人たちは自分以外の人と言うことの理解はほとんど出来ない。失語症の人の言語能力は、これら 2 つの両極端の中間のどこかに位置する。失語症の人は一般的に、十分な知的能力がある。失語症の進行中に自然に症状が回復することがあるが、その蘇りが完全であることはない。それでも大変な訓練、努力、辛抱を続けることで多少の改善を見ることが出来る。

失語症の発症

失語症は脳の傷害の結果発症する。脳傷害の原因は殆ど血管の異常である。このような脳傷害は卒中、脳内出血、脳梗塞、または溢血などと呼ばれる。医学用語では CVA と呼ばれる： Cerebral (= barais) Vascular (= blood vessel) Accident。他の原因としてはトラウマ（交通事故などによる脳傷害）または脳腫瘍がある。

人間の脳は機能するために酸素とグルコースを必要とする。CVA やその他の原因で脳内月流が停止すると脳細胞はその場で死ぬ。脳の中にはさまざまな機能の部分があるが、殆どの人の言語機能は脳の左側半分にある。この部分に傷害が発生すると失語症を発症することとなる。

他にどんな問題が発生するか？

実際失語症だけ発症していると言うのは少ない。しばしば脳の他の部分も影響を受けている。以下のような例がある：

- 半身不随状態。例えば失語症を発症するのはしばしば身体の右半分である。身体の片方の筋肉の動きが影響を受ける。従いもはや身体全体の筋肉が連動しない。

- 視力の半分を失う。大抵の場合健康な側にあるものはよく見える。しかし影響された側のものはよく見えない。

- どの程度に動くのが適当か判断出来なくなる。着る、食べる、飲むと言った単純な行動がもはや意識的に行なえなくなる。例えば **Aparaxia** に罹ると、そのように言われてもろうそくを吹き消すこと（意識的行動）ができなくなる。マッチを持っている人の指が焼けそうになっているマッチは吹き消すことができる。

- 食べる、飲む、飲み込むなどが難しい。これはこのような行動を司る脳の部分が傷害を受けているためである。また頬の筋肉の一部が麻痺しているため唾液が口の脇から流れているのに気がつかないこともある。

- 記憶の問題。記憶には言語は重要な役割をしている。言語に障害がおこると記憶も劣ってくるように思われる。この場合には主要な事項のキーワードをメモするようにするとよい。

- 異なる行動。発作の後にはこれまでとは全く異なる行動を取る場合がある。感情表現は一層困難となる。より頻繁に泣いたり、笑ったりする。こうしたことを止めるのに多くの努力を必要とするようになることもある。

- てんかん。時として傷が回復して来ると傷跡が脳内で言わばショートを起こし、呼吸困難や意識喪失などを起こすことがある。このような「てんかん」現象は長くは続かないが、突然起こることもあり、本人、家族にとっては大きな恐怖の元となる。以上で決して全てを列挙しているわけではない。失語症と付随する諸症状は個別であり、複合しておこるものでもある。

失語症の処置

失語症に罹ると入院する人も多い。脳に傷害が発生した時は特にそうなる。退院後も失語症にはさらなる処置が必要となる。この処置について誰に面倒を見てもらうべきか、必ずしもはっきりしていない。まずは最初に診てもらった先生に相談するのがよく、近くに適当な先生がいないか聞いてみることである。失語症の処置は間違いなく話し方療法専門医の分野で、基本的に言語診療にかかるのがよい。必要期間などについては回復の度合いやその国の施設、規制などによって決まる。

対話のガイドライン

失語症にかかると理解の仕方、表現の仕方が変わって来る。残っている交信能力を最大限利用して失語症に罹った人と交信することはできる。重度の失語症の人は文章の中のもっとも重要な単語しか理解できない。「キーワード」を理解する。キーワードでの交信は時として誤解を生む。キーワードと一般常識との組み合わせは誤解を生み出すこともある。

時として失語症者と大変良く理解し合っていると思っていたら、あとのからの反応で全く違っていたということもある。

もしも失語症者に何かを伝えたい時は

— 先ずは対話のための時間に余裕を取り、ゆったりと座り、相手とアイコンタクトをする。

— 対話に不安を感じていたら、まず自分について簡単なことを話す。やがて既に答えが分かっている質問に移る。

— 話はゆっくりと、文章は短く、重要な単語は強調する。

— もっとも重要な単語は書く、メッセージは繰り返し、書き留めたメモは相手に渡す。失語症者はそれを思い出すきっかけに出来るし、話の中で使うことも出来る。

— 失語症者が自己表現することを助ける。指差したり、ジェスチャーしたり、絵に描いたり、文字に書いたりする。さらに失語症者自身がこれらの行動をするように仕向ける。ポケット辞典や会話の本から一緒に探し出すこともしよう。

失語症者が何かを伝えようとしている場合

第一に状況を明確にする。誰が関わっているのか、何が起こっているのかまたは起こったのか、更に可能であれば、どこで、いつ起こっているのか、起こったのか。適切な質問をすることは非常に大事なことだし、智恵を使った質問で、

さらに順序立てて進めることが大事である。常に多くから選択できる形で質問し、選択肢は並べて聞くのがよい。

対話用補助具

多くの国に絵を指し示す本がある。中には単語、絵が描かれている。単語や絵を指し示すことにより、言いたいことを明確にさせることができる。自分の国にそのような補助具があるか医師やスピーチ診療士に尋ねて見たら良い。もしも無いと言うのであれば自分で作ればよい。その中には相手となる失語症者にとって大事な絵やイメージを入れたらよい。このやり方で話は弾むし、感じたことを話し合うこともできる。

そのような絵を指し示す本を使って話をする時には、ペンと紙を持ち話の中で重要な単語を書き留めておくようにするとよい。そうすることで、会話の流れを追ったり、記録にもなる。

辛抱第一

失語症者との対話には時間と忍耐が必要である。ここまでのポイントにも関わらず、結局は全く分かり合えていないということも起こり得る。まあ、こころで一服。しばらくして再度やってみましょう。その時はきつともっとうまく対話できるでしょう。

追加情報

AIA (国際失語症協会) のウェブサイトでは、いろいろな言語での情報が得られます。各国の協会へのリンクもあります。www.aphasia-international.com ウェブサイトでは情報の提供と共に失語症者が社会から疎外されないように、その基礎となるような試みもなされています。